

令和6年度 菟中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等

【全国学力学習状況調査】 <国語科 結果の概要> 全国の平均正答率は58.1%に対し、本校は61%であった。学習指導要領の、評価の観点、領域問題形式のすべての分野において、全国平均正答率を上回ることができた。

<成果> 言語や言語文化に関する事項は全国平均よりも5ポイント程度上回っており、読解力における土台はしっかりあるといえる。

【今後に向けて】 「書くこと」に関する問題の正答率が全国平均を下回っていることから、書くことの指導に力を入れる必要がある。

【全国学力学習状況調査】 <数学科 結果の概要> 全国の平均正答率は52.5%に対し、本校は55%であった。学習指導要領の、評価の観点、領域問題形式のすべての分野において、全国平均正答率を上回ることができた。

<成果> 領域問題形式の記述式において、全国平均正答率を6.2%上回ることができ、説明や理由を述べる問題に取り組める生徒が増えた。

【今後に向けて】 全国、大阪市と比べると無回答率が高く、問題に意欲的に取り組む力を身に付けていく必要がある。平均正答率が8.8問に対し、2問、4問、5問の正答者の割合が高いことから、個々に応じた課題に取り組めるようにしていく必要がある。

◎R6 チャレンジテストより◎

<国語科> <結果の概要> 大阪府の平均点が65.2点に足して本校の平均点は69.6点（+4.4ポイント）であった。設問ごとの正答率も、大阪府平均をほぼ上回っていたが、漢文の設問の正答率が大阪府平均を大きく下回っていた。

【成果と課題】 ○中学生チャレンジテスト（3年生）<国語>

<成果> 習熟度別や少人数授業、チームティーチングを行ってきめ細かに指導することによって、大阪府平均を上回ることができた。また、無回答率についてもほとんどの設問で府平均を下回れたのは成果である。90点以上を取った生徒が5教科の中で最も多く、上位層が伸びてきているといえる。

<今後取り組むべき課題> 標準偏差が大阪府平均よりも高く、度数分布をみてもボリュームゾーンがいくつもできており、下位から中位層をフォローしていく必要がある。

<社会科> <結果の概要> 令和6年度は府平均に対して+5.9ポイント。昨年度（第2学年）は府平均に対して+7ポイントであったので若干下がった。度数分布の形状は正規分布の中心が少し右によった形であるが、今回は25点～29点の分布割合が府平均と同じ水準にあった（低位層も一定数いる）。

【成果と課題】 ○中学生チャレンジテスト（3年生）<社会>

<成果> ・平均点が大阪府平均を約6ポイント上回っていた。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

令和6年度 董中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2-1 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

2-2 「大阪市版チャレンジテストplus」の調査の目的

- (1) 生徒及び保護者が、学習理解度及び学習状況等を知り、目標をもって主体的に学習に取り組めるようにする。
- (2) 学校が生徒一人ひとりの学力を的確に把握し、学習指導の改善及び進路指導に活用する。
- (3) 学びの連続性を確立する観点から、客観的・経年的なデータを把握、分析し、効果的な指導方法や課題を「見える化」し、その改善に役立てる。

3 「大阪市英語力調査（GTEC）」の調査の目的

- (1) グローバル社会において活躍し貢献できる人材の育成をめざし、生徒の英語力の充実・向上を図るため、本市教育振興基本計画に基づき、生徒に求められる英語力や学習の習熟過程等を把握・検証する。
- (2) 生徒が自らの英語力を的確に把握するとともに、生徒の英語力の実態を分析することにより、各学校における学習指導の充実や改善、工夫に役立てる。

4 「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の調査の目的

- (1) 子供の体力・運動能力等の状況に鑑み、国が全国的な子供の体力・運動能力の状況を把握・分析することにより、子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会、各国公私立学校が全国的な状況との関係において自らの子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、子供の体力・運動能力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各国公私立学校が各児童生徒の体力・運動能力や運動習慣、生活習慣、食習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

令和6年度 董中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

1 全国学力・学習状況調査

| 学年 | | 生徒数 (人) | 平均正答率(%) | | 平均無解答率(%) | |
|-------|-----|------------|----------|------|-----------|------|
| 実施月日 | | | 国語 | 数学 | 国語 | 数学 |
| 3 年 | 学校 | 252 | 61 | 55 | 4.4 | 12.2 |
| | 大阪市 | — | 56 | 51 | 4.1 | 12.5 |
| 4月18日 | 全国 | — | 58.1 | 52.5 | 3.9 | 11.3 |

2 中学生チャレンジテスト

| 学年 | | 生徒数 (人) | 平均点(点) | | | | | 平均無解答率(%) | | | | |
|------|-----|------------|--------|------|------|------|------|-----------|-----|------|-----|-----|
| 実施月日 | | | 国語 | 社会※ | 数学 | 理科※ | 英語 | 国語 | 社会※ | 数学 | 理科※ | 英語 |
| 3 年 | 学校 | 257 | 69.6 | 56.3 | 53.0 | 54.9 | 56.2 | 3.5 | 3.9 | 12.8 | 3.4 | 6.0 |
| | 大阪市 | — | 65.4 | 50.2 | 48.8 | 52.1 | 54.0 | 4.9 | 4.7 | 14.3 | 4.1 | 6.5 |
| 9月3日 | 大阪府 | — | 65.2 | 50.4 | 49.1 | 52.3 | 53.6 | 5.3 | 5.0 | 14.8 | 4.4 | 6.9 |
| 2 年 | 学校 | 207 | 74.0 | 65.1 | 66.5 | 59.5 | 66.4 | 5.0 | 1.6 | 4.1 | 2.8 | 3.8 |
| | 大阪市 | — | | | | | | | | | | |
| 1月9日 | 大阪府 | — | 65.5 | 49.5 | 50.7 | 45.9 | 54.0 | 9.3 | 5.2 | 9.5 | 6.6 | 7.9 |
| 1 年 | 学校 | 224 | 67.2 | 62.6 | 59.4 | 61.5 | 69.6 | 5.9 | | 6.4 | | 3.4 |
| | 大阪市 | — | | 53.7 | | 55.6 | | | | | | |
| 1月9日 | 大阪府 | — | 58.5 | — | 49.8 | — | 61.5 | 9.4 | — | 8.8 | — | 5.8 |

- ※ 1年生の社会・理科については、「大阪市版チャレンジテストplus」として実施
 ※ 1年生の理科は化学的領域を選択
 ※ 2年生の社会はA問題を選択 2年生の理科はA問題を選択
 ※ 3年生の理科はC問題を選択

3 大阪市英語力調査 (GTEC)

| 学年 | | 生徒数 (人) | 読むこと 【リーディング】 | 聞くこと 【リスニング】 | 書くこと 【ライティング】 | 話すこと 【スピーキング】 |
|--------|-----|------------|------------------|-----------------|------------------|------------------|
| 実施月日 | | | (スコア) | (スコア) | (スコア) | (スコア) |
| 3 年 | 学校 | 244 | 114.1 | 108.4 | 161.1 | 110.3 |
| 10月25日 | 大阪市 | — | 105.7 | 104.6 | 149.6 | 102.1 |

4 全国体力・運動能力、運動習慣等調査

| 学年 | 生徒数 (人) | 握力 | 上体 起こし | 長座 体前屈 | 反復 横とび | 20m シャトル ラン | 持久走 男子1500m 女子1000m | 50m走 | 立ち 幅とび | ハンドボール 投げ | 体力 合計点 |
|---------|------------|-------|-----------|-----------|-----------|-------------------|---------------------------|------|-----------|--------------|-----------|
| | 195 | (kg) | (数) | (cm) | (点) | (回) | (秒) | (秒) | (cm) | (m) | (点) |
| 2 年 男 子 | 学校 | 26.50 | 27.10 | 44.20 | 51.30 | 83.60 | | 7.90 | 196.00 | 21.70 | 42.00 |
| | 大阪市 | 28.30 | 26.40 | 42.70 | 51.50 | 79.70 | | 8.00 | 194.60 | 19.80 | 49.30 |
| | 全 国 | 28.90 | 25.90 | 44.40 | 51.50 | 78.90 | | 7.90 | 197.10 | 20.50 | 50.00 |
| 2 年 女 子 | 学校 | 21.40 | 22.60 | 45.50 | 46.60 | 56.10 | | 8.80 | 167.30 | 12.20 | 47.90 |
| | 大阪市 | 22.90 | 22.20 | 45.60 | 45.80 | 52.90 | | 9.00 | 167.00 | 12.00 | 47.50 |
| | 全 国 | 23.10 | 21.50 | 46.40 | 45.60 | 50.60 | | 8.90 | 166.30 | 12.40 | 47.30 |

令和6年度 菫中学校のあゆみ ―結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について―

調査結果から

【全国学力学習状況調査】＜国語科 結果の概要＞ 全国の平均正答率は58.1％に対し、本校は61％であった。学習指導要領の、評価の観点、領域問題形式のすべての分野において、全国平均正答率を上回ることができた。

＜成果＞ 言語や言語文化に関する事項は全国平均よりも5ポイント程度上回っており、読解力における土台はしっかりあるといえる。

【今後に向けて】「書くこと」に関する問題の正答率が全国平均を下回っていることから、書くことの指導に力を入れる必要性がある。

【全国学力学習状況調査】＜数学科 結果の概要＞ 全国の平均正答率は52.5％に対し、本校は55％であった。学習指導要領の、評価の観点、領域問題形式のすべての分野において、全国平均正答率を上回ることができた。

＜成果＞ 領域問題形式の記述式において、全国平均正答率を6.2％上回ることができ、説明や理由を述べる問題に取り組める生徒が増えた。

【今後に向けて】 全国、大阪市と比べると無回答率が高く、問題に意欲的に取り組む力を身に付けていく必要がある。平均正答率が8.8問に対し、2問、4問、6問の正答者の割合が高いことから、個々に応じた課題に取り組めるようにしていく必要がある。

◎R6 チャレンジテストより◎

《国語科》＜結果の概要＞ 大阪府の平均点が65.2点に足して本校の平均点は69.6点（＋4.4ポイント）であった。設問ごとの正答率も、大阪府平均をほぼ上回っていたが、漢文の設問の正答率が大阪府平均を大きく下回っていた。

□

【成果と課題】○中学生チャレンジテスト(3年生)＜国語＞

＜成果＞ 習熟度別や少人数授業、チームティーチングを行ってきめ細かに指導することによって、大阪府平均を上回ることができた。また、無回答率についてもほとんどの設問で府平均を下回れたのは成果である。90点以上を取った生徒が5教科の中で最も多く、上位層が伸びてきているといえる。

＜今後取り組むべき課題＞ 標準偏差が大阪府平均よりも高く、度数分布をみてもボリュームゾーンがいくつもできており、下位から中位層をフォローしていく必要がある。

《社会科》＜結果の概要＞ 令和6年度は府平均に対して＋5.9ポイント、昨年度(第2学年)は府平均に対して＋7ポイントであったので若干下がった。度数分布の形状は正規分布の中心が少し右によった形であるが、今回は25点～29点の分布割合が府平均と同じ水準にあった(低位層も一定数いる)。

【成果と課題】○中学生チャレンジテスト(3年生)＜社会＞

＜成果＞ ・平均点が大阪府平均を約6ポイント上回っていた。

＜課題＞ 回答の状況を分野別にみると歴史・地理どちらも同じ程度府平均を上回っている。観点別にみると思考・判断・表現が知識に比べて低い(約2.5ポイント)。また、問題形式別にみると選択式に比べて短答式と記述式が低い。特に記述式は府平均とほぼ同じ水準である。さらに個別に試験の問題別正答率の府平均との差に目を向けると、①記述式問題の正答率が低いこと、②資料活用問題の正答率が低いこと、③難易度がやや高めのもの(いわば応用問題)の正答率が低い、傾向が見られる。

対策:①や②については、授業で資料活用や記述問題の演習を行う必要があるのかもしれない。③については、生徒自身の社会科に対する関心や意欲によって正答率が変動すると考えられるため、普段から社会科に対する興味関心を高める授業に取り組んでいく必要があると思われる。また、得点が低い層も一定程度いるので、暗記中心になりがちな社会科の勉強に失望せず意欲的に取り組めるような工夫が必要であると考えられる。例えば、副教材のワークの有効的な使い方、授業での演習、家庭学習の取り組みなどが考えられる。

《数学科》＜結果の概要＞ 大阪府の平均点が49.1点に足して本校の平均点は53.0点（＋3.9点）であった。設問ごとの正答率を見ても、大阪府平均をほぼ上回っていたが、無回答率が高い問題が少しあった。

【成果と課題】

○中学生チャレンジテスト(3年生)＜成果＞ 習熟簿別授業を行い、それぞれのレベルにあった問題を解くことによって、大阪府平均を上回ることができた。しかし、知識・技能を問われるや記述式問題において、無回答率が高い傾向がある。わからない問題はあきらめてしまう生徒が多くみられるので、根気強く問題に取り組む力と自分の言葉で説明をする力を身に付けていく必要がある。

＜今後取り組むべき課題＞ 平均より少し下の層のボトムアップを図るために、習熟度別授業で基礎学習の強化をしていく。
一斉授業でも、教えあいの時間などを設け、知識の定着を図っていく。

《理科》＜結果の概要＞ 総計257名が受験し、平均点は54.9であった。これは大阪府平均52.3より2.6ポイント高い結果である。学習指導要領の領域等別平均点においても3観点において平均は上回り、「地球」の分野では平均点と同じ結果となった。5点おきの得点の層にはばらつきがみられる。70～74点の生徒幅の人数が多い点と、45～54点の生徒幅の人数が少ない点がみられる。

【成果と課題】○中学生チャレンジテスト(3年生)（理科）

＜成果＞ 平均を上回ることができていた。3年生の履修範囲も含む「生命」の領域においては大阪府の平均19.3と比較して、1.3ポイントプラスの20.6であった。問題形式別平均点においても、例年、選択式の得点力が高く短答式や記述式は大阪府平均を下回ることもみられたが、今年度においては全ての問題において平均以上に得点出来ている。

＜今後取り組むべき課題＞ 「25～44点の生徒幅」にみられるようなゾーンを45点以上に引き上げていくために、現在行っている3年生夏休みの復習課題と、ふり返りを続けて行うことは必要であると考ええる。また1.2年次の授業を丁寧に進めることも必要であり、例えば実験における安全の留意点や化学反応式、質量の変化を計算する。実験内容も含めて、十分な習得に至っていない状況がないようにし、3年次で生徒たちの負担が減るようにしていく必要がある。各学年時に履修した内容を各学年時にきちんと整理し、3年次でも府平均をコンスタントに続けて越えていけるようにすることが、今後の課題である。

《英語科》＜結果の概要＞ R6年度チャレンジテスト中3(英語)については、大阪府平均点53.6に対し、56.2と2.6ポイント上回ることができた。4技能のうち『聞くこと』『読むこと』『書くこと』のカテゴリにおける各設問の正答率は、3技能ともに大阪府の正答率を上回ることができた。

【成果と課題】○中学生チャレンジテスト(3年生)＜英語＞

＜成果＞ 英語を得意としていない生徒が多く、1学期から基本的な事項を帯活動として復習するなど取り組み、R6年度チャレンジテスト中3(英語)については、大阪府平均点53.6に対し、56.2と2.6ポイント上回ることができた。

4技能のうち『聞くこと』『読むこと』『書くこと』のカテゴリにおける各設問の正答率は、3技能ともに大阪府の正答率を上回ることができた。

＜今後取り組むべき課題＞ チャレンジテストの大問9の「社会的な話題についてまとまりのある会話文を読み、話の概要を捉えて、内容の要点を適切に把握することができる」の趣旨の出題において、『文中の下線部thatが意味する内容に合う文を選ぶ問題』と『会話文の内容と合う英文を選ぶ問題』が大阪府の正答率をわずかに上回った。このことから本校ではある程度まとまった分量の長文を読むことに課題があると思われる。教科書の本文以外の文章問題等にも取り組むなど、『読むこと』の内容把握、解答の方法など今後、積極的に取り組んでいかなければならない。

令和6年度 菫中学校のあゆみ ―結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について―

調査結果から

令和6年度「チャレンジテスト(1年)」

＜国語＞

＜結果の概要＞

- ・大阪府平均点58.5、本校平均点67.2と8.7ポイント上回っていた。また、分類・区分ごとに見てもすべてにおいて大阪府平均を上回っている。
- ・無解答率は、大阪府平均9.4、本校5.9と3.5ポイント低かった。
- ・個別設問ごとに見ると漢字「祝う」を書く間だけ府平均をなぜか下回った。

【成果と課題】

＜成果＞

- ・日々真面目に授業に取り組もうとする多くの生徒たちが、学習の効果を出している。

＜課題＞

- ・日々真面目に授業に取り組もうとする雰囲気についていけない生徒もいるので、みんなで学習活動ができる方策を探らなければならない。

＜数学＞

＜結果の概要＞

大阪府平均に対して平均点が9.6ポイント、中央値が12.0ポイント上回っていた。分類・区分別の集計結果においても、どの区分でも大阪府平均を上回っていたが、記述で回答する問題の得点率が大阪府平均との差が最も小さかった。

【成果と課題】

＜成果＞

放課後のフォローアップやTTでの授業が成果をなしていると考ええる。

＜課題＞

記述や長文を読み回答を考える問題に強くなるよう、必要な言葉を向きとり回答する問題や単語の意味を理解する必要のある問題に重点的に取り組む。

＜英語＞

＜結果の概要＞

大阪府の平均点61.5に対して、本校の平均点は69.6となり＋8.1ポイント上回った。また中央値は大阪府62に対して、本校は72となり、＋10ポイントとなった。

【成果と課題】

＜成果＞

領域別の得点率でみると「聞くこと」が＋1.6ポイント、「読むこと」が＋4.5ポイント、「書くこと」が＋2ポイントとなり、読むことが優れていることがわかる。また、選択問題では無回答率がほぼ0パーセントであった。聞くことの問題では、絵を見て英文を聞き答える問題において特に正答率が高い。

＜課題＞

聞くことの問題では、絵を見て答える問題の正答率が高い一方で、情報を読み取り英語文を聞く問題では正答率があまり良くなかった。会話文が長くなり聞き取る量が増えると苦手に感じるようだ。学年末テストでも同じように長めで情報量が多いと難しくなったと言う生徒が多かった。

書くことの問題では、記述式が苦手であり並び替え問題や会話にあり応答を書く問題の正答率が低く、無回答率が高かった。

聞く力を高めるには、より長めの英会話に慣れるよう触れる機会を増やし、書く力を高めるには文法の問題で、記述で答える問題を今より増やしていく必要がある。英語が苦手な生徒には難しく感じると思う取り組みたいと思えるよう復習や習熟度、TTなどで対策をしていきたい。

令和6年度「チャレンジテストplus(1年)」

＜社会＞

＜結果の概要＞

- ・大阪市の平均正答率53.7に対して、菫中学校の平均正答率が62.6となり、8.9ポイント上回る結果となった。
- ・地理・歴史の領域別、それぞれの観点別をみても、すべてにおいて大阪市の平均正答率を上回ることができた。

【成果と課題】

＜成果＞

平均点は、大阪市の平均を8.9ポイント上回っており、日々の学習の成果を充分に発揮することができている。分野別にみても、地理的分野では11.3ポイント、歴史的分野では6.3ポイント上回ることができた。どちらの分野も普段の授業の内容が、個人個人にしっかりと定着している成果だと考える。

評価観点別集計結果を見ると、「知識・技能」の平均が大阪市平均よりも8.7ポイント高く、用語やその設問の意味をしっかりと理解できていることがわかる。資料の活用においても、授業でもさまざまな資料や地図を用いて学習を進めたことから、それらを活用する技術も身につけることができていると考えられる。

設問別集計結果において、大きく大阪市平均正答率を上回っている設問は、地理的分野では世界の気候分布に関する設問や、世界各地の住居に関する設問で、授業の中でも生徒たちが興味を示して取り組めた分野であった。歴史的分野では、古代文明に関する設問や聖徳太子に関連する設問の正答率が高かった。こちちの単元も授業において、丁寧に説明し、理解を深めた成果だと考える。

＜課題＞

得点分布をみると、正解率8割以上の生徒が30%近くを占めており、普段の定期テストを含めてその成果を充分に発揮している。それに対し、正答率3割に満たない生徒も5%近く存在し、普段の授業を含めそういった生徒に向けての基礎基本の指導の徹底が必要だと感じさせられた。

ほとんどの設問で大阪市平均を上回っていたのに対し、歴史的分野の年代をこたえる問題や大仙古墳や埴輪に関する問題においては、大阪市の平均正答率を僅かに下回っており、定期テストでも同じような傾向が見られたので、そのあたりを改善していかなければならないと考えている。

＜理科＞

＜結果の概要＞

- ・大阪市の平均正答率55.6に対して、菫中学校の平均正答率が61.5となり、5.9ポイント上回る結果となった。
- ・学習指導要領における粒子・生命の領域別や、それぞれの観点別にみても、すべて大阪市の平均正答率を上回ることができた。

【成果と課題】

＜成果＞

平均点は、大阪市の平均を5.9ポイント上回った。領域別にみても、粒子の領域では7.6ポイント、生命の領域では4.1ポイント上回っており、授業で学んだ内容については概ね理解しているものとみられる。

評価観点別集計結果を見ると、「知識・技能」の平均が大阪市平均よりも4.0ポイント高く、基礎的な知識が定着しているものと考えられる。「思考・判断・表現」の平均は、7.8ポイント高く、用語やその設問の意味を理解した上で、表現できる生徒が多いことがわかる。

設問別集計結果において、大きく大阪市平均正答率を上回っている設問は、粒子の領域では、気体の発生方法に関する設問や、物質が固体から液体に変化する現象に関する設問であった。実験を通して扱った内容であるため、印象に残りやすいとみられる。生命の領域では、ホニユウ類の特徴についての設問や、ルーペの使い方についての設問の正答率が高かった。授業の中でも生徒たちが興味を示して取り組めた分野であった。

＜課題＞

得点分布をみると、正解率9割以上の生徒が35%近くを占めており、授業へ熱心に取り組む成果を充分に発揮している。それに対し、正答率3割に満たない生徒も15%ほど存在しており、普段の授業から基礎の指導の徹底が必要だと感じさせられた。

粒子の分野の「密度を求め、分析した結果を記述する」問題の正答率に関して、大阪市の平均は上回っているものの著しく低いため、今後ふりかえりが必要であり、改めて理解し習得させる必要がある。また、動物の分類に関する設問のなかには、大阪市の平均正答率を僅かに下回るものもあるため、復習を継続し、十分な習得に至らない状況がないようにしなければならない。

調査結果から

令和6年度「チャレンジテスト(2年)」

＜国語＞＜結果の概要＞

令和5年度の「チャレンジテスト(1年) 国語」は、大阪府の平均点が60.8点であったのに対して、本校の平均点は68.5点と、府平均に対してプラス7.7ポイントであった。それに対して、今年度の「チャレンジテスト(2年) 国語」は、大阪府の平均点が65.5点であったのに対して、本校の平均点は74.0点と、府平均に対してプラス8.5ポイントであった。大阪府の平均点自体が昨年度と比較して4.7点も増加しているにも関わらず、本校はその府平均を昨年度以上に上回ることができた。

中央値については、令和5年度は府平均に対してプラス14.0ポイント(府66.0 本校80.0)であったが、今年度は、府平均に対してプラス10.0ポイント(府69.0 本校79.0)であった。これは、平均点全体が上昇したことによるものと推察される。

標準偏差については、令和5年度は府平均に対してマイナス2.3ポイント(府23.3 本校21.0)であったが、今年度は、府平均に対してマイナス3.7ポイント(府21.4 本校17.7)であった。標準偏差は0に近づくにつれてばらつきが小さくなるため、昨年度以上にばらつきが小さくなっていることが分かる。

得点分布グラフからも、0～4点が1名、10～14点が1名いたものの、他は全員30点以上を取っていることが分かる。74点までは大阪府平均よりも比率が少なく、逆に75点以上の比率は大阪府平均よりも多い。設問別で検証すると、令和5年度は全30問中29問の正答率について、府平均を上回っていたが、本年度は全31問中30問の正答率について、府平均を上回っていた。

【成果と課題】

＜成果＞

国語科は他教科と比較しても大阪府の平均点が65.5点と高かったにも関わらず、本校の平均点は74.0点と、府平均に対してプラス8.5ポイントと大幅に上回ることができた。また、本校の標準偏差は昨年度以上にばらつきが小さくなっている。得点分布グラフからも、74点までは大阪府平均よりも比率が少なく、逆に75点以上の比率は大阪府平均よりも多いことが分かる。いずれも、振り返りプリントや日頃の授業での取り組みの成果であると考えられる。

＜課題＞

無回答率に着目すると、漢字の読み1問を除くと、本校では無回答率が10%を超える設題が3問あった。大阪府平均では、無回答率が10%を超える設題は11問である(漢字の読み1問は同様に除く)。大阪府平均よりも低いものの、それでも無回答率が10%を超える設題が3問あるため、今後もより書く問題に取り組めるように、次年度に向けて努め、授業づくりをしていく必要がある

＜数学＞＜結果の概要＞

・全体としての結果は、府平均を15.8点上回った。

・得点分布のグラフは、府は緩やかな山型のグラフであることに對し、本校は右上がりのグラフとなっている。

・中央値は、府は50.0点に対し、本校は73.0点で、最頻値は、府は20～24点であったが、本校は75～79点であった。また、標準偏差は、府が24.1に対し、本校は22.9で、全体の結果よりもばらつきの少ない結果となった

【成果と課題】

＜成果＞

すべての区分において、大阪府の正答率を上回ることができた。

チャレンジテスト対策として、過去5年分の問題に取り組んだ。また、分野別に分け、繰り返し問題を解くことによって、知識の定着を図った。その成果もあり、すべての分野で平均的に点数を取ることができた。

・今年度は計6時間かけて過去問対策を行った。問題を解くだけでなく、解説プリントも作り、もう一度復習授業を行いながら、知識の定着を図った。その効果あってか、知識・技能の観点では大阪府平均を8.5ポイント上回る結果となった。

・知識だけでなく、前年度に引き続き「深い学び」に力を入れて日々授業を行った。思考・判断・表現の観点では5.0ポイント上回り、記述式の無回答率も、大阪府の半分以下の割合となっている。すぐに諦めるのではなく、じっくり読み、深く考え、答えを導く思考力が徐々に高まっていると感じた。

＜課題＞

・記述式の問題の得点率が低く、事象をグラフの特徴に即して解釈し、グラフが表していることを数学的に説明することを苦手とする生徒が多かった。問題が解けるだけでなく、どのように解答を導いたのか、その過程を数学的に説明する課題に取り組む、「自分の言葉で自分の考えを説明する」力を身につけさせたい。

・平均点より10点程度上下の得点である生徒への個別の指導が不足している。基礎をしっかりと定着させることや応用問題にチャレンジし、粘り強く取り組む力を養うことを今後の授業の中で指導していきたい。また、それぞれの学力に合わせて、自己の解く力を伸ばせるように習熟度別授業を進めていきたい。

＜社会＞＜結果の概要＞

・大阪府平均49.5に対し、学校平均が65.1となり、15.6ポイント上回るという成績であった。

・地理・歴史の分野別に見ても、選択式・短答式・記述式の問題形式別平均点を見ても、すべて大阪府平均を上回ることができた。

・各設問別の正答率も、すべて大阪府平均を下回るものはなかった。

【成果と課題】

＜成果＞

大阪府平均を15.6ポイント上回り、分野別・問題形式別の平均点においてもすべて大阪府平均を上回っていたことが成果である。無回答率についても、大阪府平均が5.2%に対し、学校平均は1.6%であったため、多くの生徒があらかじめことなく問題に向き合っていることがうかがえる。

設問別集計結果においても、正答率が大阪府平均を下回る設問はなかったことから、授業内容の定着が読み取れた。地理的分野において、府平均と比較して、著しく正答率が高かった設問は、「太平洋ベルト」や「ヒートアイランド現象」といった語句を答える短答式問題で、いずれも20ポイント近く上回っていた。歴史的分野においては、「江戸幕府の政治の推移」や「元禄文化」に関する問題の正答率が府平均を大きく上回っており、授業において江戸時代の政治や文化の特徴、人物名・作品などを丁寧に整理した成果であると考えられる。

＜課題＞

得点分布をみると、正答率8割以上の生徒が30%近くを占めており、日ごろの学習の成果を発揮している。それに対し、正答率3割以下の生徒が7%となっており、社会科の学習に苦手意識がある生徒への、基本的内容の徹底が必要であるとわかった。方策として、授業中に重要語句を強調して定着させる、定期テスト前の課題としているワーク等を単元ごとに整理する、授業の展開をこれまで以上に工夫していくことなどが必要である。

今回、正答率が最も低く、正答率が府平均と同じであった設問が、「鉄砲の生産地である国友の場所を選ぶ」という問題であった。鉄砲の生産地は「堺」というイメージが強く、「国友」という地名にふれることが少なかったことが要因と考えられる。資料集等を活用し、より詳細な内容を授業で確認する必要があると考える。

＜理科＞＜結果の概要＞

大阪府平均が45.9点に対して、本校2年生の平均点は59.5点となり13.6ポイント上回っている。分野別で見ると、「エネルギー」が1.8ポイント、「粒子」が5.6ポイント「生命」が6.2ポイントそれぞれ上回った。

【成果と課題】

＜成果＞

・今年度は計6時間かけて過去問対策を行った。問題を解くだけでなく、解説プリントも作り、もう一度復習授業を行いながら、知識の定着を図った。その効果あってか、知識・技能の観点では大阪府平均を8.5ポイント上回る結果となった。

・知識だけでなく、前年度に引き続き「深い学び」に力を入れて日々授業を行った。思考・判断・表現の観点では5.0ポイント上回り、記述式の無回答率も、大阪府の半分以下の割合となっている。すぐに諦めるのではなく、じっくり読み、深く考え、答えを導く思考力が徐々に高まっていると感じた。

＜課題＞

・問題形式が、選択式や短答式のものに比べて、記述式の正答率がまだ低いと感じる。無回答は減っているので、何か書こうと努力している様子は伺えるが、正答率を上げるためにも、今後も思考力を高めるために、引き続き「深い学び」を実現できる授業を展開していきたい。

・得点が一桁の生徒はいなかった。次は10点～20点代の層の引き上げのために、より丁寧な個別指導と、デジタルドリルを活用した基礎力の定着を図ってきたい。

＜英語＞＜結果の概要＞

本校の結果は、平均点+12.4点、中央値も+17.0大阪府を上回った。また、1年生の時の結果と比較して平均点+2.2点、中央値は+3.0点となった。

【成果と課題】

＜成果＞

領域別の得点率でみると、聞くこと+8.4点、読むこと+12.3点、書くこと+14.9点となり、昨年度と同様本校の生徒は大阪府の生徒と比較して書く力が優れていることがわかる。また、選択問題については、無回答率がほぼ0%の上、正答率が高いことがわかった。

＜課題＞

書くことの領域において、「会話文を読み、適切な答えを英語2語で書く」「会話文を読み、空欄に英語3語を入れる」「日本語の意味になるよう英語2語で答える」などの英語で解答するものは無回答率が17%以上あり、諦めて解答できていない生徒も多くいることを無視できない。平均点では大阪府を大きく上回っていても、実力が二極化し、その差が埋まらない点に留意して、指導を続けていく必要がある。

選択問題がない場合、自力で文章を読み取り正解を探し出すことが苦手な生徒と解くのを諦めてしまう生徒が多いた。文法や教科書本文を読み解く練習はしてきたが、初めて触れる文章を読み解く練習は不足していたと感じる。英語が苦手な生徒もいるため、読解力向上のためのデジタル教材などの利用に加え、習熟別の授業を行い、今までの復習をしながら所見の文章も取り上げ、対策をしていきたい。

令和6年度 道中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

全国学力・学習状況調査 教科に関する調査より

【全国学力学習状況調査】＜国語科 結果の概要＞ 全国平均正答率は58.1％に対し、本校は61％であった。学習指導要領の、評価の観点、領域別形式のすべての分野において、全国平均正答率を上回ることができた。

＜成果＞ 言語や言語文化に関する事項は全国平均よりも6ポイント程度上回っており、読解力における土合はしっかりあるといえる。

【今後に向けて】「書くこと」に関する問題の正答率が全国平均を下回っていることから、書くことの指導に力を入れる必要がある。

【全国学力学習状況調査】＜数学科 結果の概要＞ 全国平均正答率は52.5％に対し、本校は55％であった。学習指導要領の、評価の観点、領域別形式のすべての分野において、全国平均正答率を上回ることができた。

＜成果＞ 領域別形式の配述式において、全国平均正答率は6.2％を上回ることができ、説明や理由を述べる問題に取り組める生徒が増えた。

【今後に向けて】全国、大阪市と比べると無回答率が高く、問題に意欲的に取り組む力を身に付けていく必要がある。平均正答率が6.8問に対し、2問、4問、6問の正答者の割合が高いことから、個々に応じた課題に取り組めるようにしていく必要がある。

＜国語科＞ ＜結果の概要＞ 大阪府の平均点が85.2点に足して本校の平均点は88.6点（＋4.4ポイント）であった。設問ごとの正答率も、大阪府平均をほぼ上回っていたが、漢文の設問の正答率が大阪府平均を大きく下回っていた。

【成果と課題】○中学生チャレンジテスト(3年生)＜国語＞

＜成果＞ 習熟度別や少人数授業、チームティーチングを行ってきめ細かに指導することによって、大阪府平均を上回ることができた。また、無回答率についてもほとんどの設問で府平均を下回れたのは成果である。90点以上を取った生徒が5教科の中で最も多く、上位層が伸びてきているといえる。

＜今後取り組むべき課題＞ 標準層達が大阪府平均よりも高く、度数分布をみてもボリュームゾーンがいくつまでできており、下位から中位層をフォローしていく必要がある。

＜社会科＞ ＜結果の概要＞ 令和6年度は府平均に対して＋5.8ポイント。昨年度(第2学年)は府平均に対して＋7ポイントであったので若干下がった。度数分布の形状は正規分布の中心が少し右によった形であるが、今回は25点～28点の分布割合が府平均と同じ水準にあった(低位層も一定数いる)。

【成果と課題】○中学生チャレンジテスト(3年生)＜社会＞

＜成果＞ ・平均点が大阪府平均を約6ポイント上回っていた。

＜課題＞ 国語の状況を分野別にみると歴史・地理どちらも同じ程度府平均を上回っている。観点別にみると思考・判断・表現が知識に比べて低い(約2.5ポイント)。また、問題形式別にみると選択式に比べて短答式と配述式が低い。特に配述式は府平均とほぼ同じ水準である。さらに個別に試験の問題別正答率の府平均との差に目をむけると、①配述式問題の正答率が低いこと、②資料活用問題の正答率が低いこと、③難易度がやや高めめの(いわば応用問題)の正答率が低い、傾向が見られる。

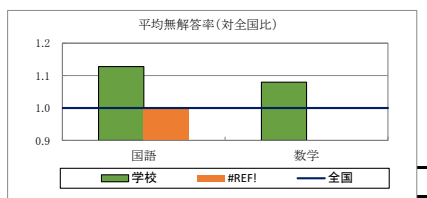
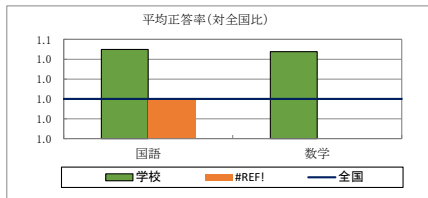
対策：①や②については、授業で資料活用や配述問題の演習を行う必要があるのかもしれない。③については、生徒自身の社会科に対する関心や意欲によって正答率が変動すると考えられるため、習熟度別や少人数授業、チームティーチングを行ってきめ細かに指導することによって、大阪府平均を上回ることができた。また、得点が高い層も一定数いるので、学習中心になりながら社会科の勉強に失墜せず意欲的に取り組めるような工夫が必要であると考える。例えば、副教材のワークの有効的な使い方、授業での演習、家庭学習の取り組みなどが考えられる。

＜数学科＞ ＜結果の概要＞ 大阪府の平均点が49.1点に足して本校の平均点は53.0点（＋3.9点）であった。設問ごとの正答率を見ても、大阪府平均をほぼ上回っていたが、無回答率が高い問題が少しあった。

【成果と課題】

| | 平均正答率(%) | |
|----|----------|------|
| | 国語 | 数学 |
| 学校 | 61 | 55 |
| 全国 | 58.1 | 52.5 |

| | 平均無解答率(%) | |
|----|-----------|------|
| | 国語 | 数学 |
| 学校 | 4.4 | 12.2 |
| 全国 | 3.9 | 11.3 |



| 学習指導要領の内容 | 対象設問数(問) | 平均正答率(%) | | |
|--------------------|----------|----------|------|------|
| | | 学校 | 大阪府 | 全国 |
| (1)言葉の特徴や使い方に關する事項 | 3 | 65.1 | 57.5 | 59.2 |
| (2)情報の扱い方に關する事項 | 2 | 60.8 | 58.5 | 59.6 |
| (3)我が国の言語文化に關する事項 | 1 | 80.5 | 75.3 | 75.6 |
| A 話すこと・聞くこと | 3 | 59.9 | 55.2 | 58.8 |
| B 書くこと | 2 | 62.7 | 62.2 | 65.3 |
| C 読むこと | 4 | 51.4 | 46.2 | 47.9 |

| 学習指導要領の領域 | 対象設問数(問) | 平均正答率(%) | | |
|-----------|----------|----------|------|------|
| | | 学校 | 大阪府 | 全国 |
| A 数と式 | 5 | 57.2 | 49.6 | 51.1 |
| B 図形 | 3 | 45.4 | 38.9 | 40.3 |
| C 関数 | 4 | 60.4 | 58.1 | 60.7 |
| D データの活用 | 4 | 55.2 | 52.8 | 55.5 |

